

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00513

研究課題名（和文）朝鮮の演劇人安英一の演劇活動全般に関する通時的研究

研究課題名（英文）A diachronic study on the theatrical activities of Ahn Yeong-il

研究代表者

金 牡蘭（KIM, Moran）

早稲田大学・総合研究機構・その他（招聘研究員）

研究者番号：90732941

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は当初朝鮮の演劇人安英一の活動を通時的に辿り、その演劇活動の全貌を把握することを目指していた。しかし、コロナ禍における研究活動の制約により、日本での調査に適合した主題へと研究の方向を修正することになり、朝鮮の演劇人と関わりの多かった村山知義の朝鮮関連活動を総合的に把握することを新たな目標と定めた。村山知義のスクラップブック資料を中心に研究調査を行った本研究は、これまで本格的に論じられてこなかった1945年朝鮮長期滞在時の演劇活動について新たな事実を多く発見し、村山知義と朝鮮演劇の関係について再考することができた。これらの成果は共著の形で発表し、講演を通して韓国側にも発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は村山知義の戦後における朝鮮演劇との関連までを含むものであり、この点において帝国/植民地の文化連環のなかで主に論じられてきた彼の朝鮮関連活動に関する議論を、大きく更新するという意義を持つ。帝国/植民地の関係性が、植民地の「解放」によって終結するのではなく、様々な「植民地以降」の問題と直接に、または緩やかに繋がっていることを考えるなら、戦前と戦後の村山知義において「朝鮮」という他者がどのように変容するかは重要な問題である。その意味で本研究は、戦前と戦後を跨ぎながら、連続と断絶の面々を明らかにしようとする今日の多くの文化研究と共鳴し、それらに一定の示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：This research originally aimed to trace the activities of Korean theater artist Ahn Young-il and to grasp the complete picture of his theatrical activities. However, due to restrictions on research activities in the coronavirus pandemic, the research theme had to be changed to one that is more suitable for research in Japan. So I have set it as a new goal to comprehensively discuss the Korea-related activities of Tomoyoshi Murayama, who had many connections with Korean men of theater. In this research, conducted mainly on Murayama's scrapbook materials, I discovered many new facts about Murayama's theatrical activities during his long stay in Korea in 1945, which had not been seriously discussed until now, and reconsidered the relationship between Murayama and Korean theater. These results were published in the form of a co-authored book and presented to the Korean public through academic lectures.

研究分野：文学文化

キーワード：朝鮮演劇 村山知義 国民演劇 解放期 左翼演劇

1. 研究開始当初の背景

安英一は、日本に留学中の1931年から、新劇運動に関わり始めた。留学先の日本大学を中退した彼は、東京在住の朝鮮人による新劇運動に参加し、1936年に在東京留学生の劇団である朝鮮芸術座が解体されてからは、村山知義の率いる新協劇団の演出部に所属し、演劇活動を続けた。当時、朝鮮の演劇人の多くが日本留学時代に演劇に出会った後、朝鮮に帰国して朝鮮における新劇運動に投身する道歩んだなかで、安英一のように日本の演劇界に残り活動を続けた例は稀である。そのため、安英一は、大笹吉雄の大著『日本現代演劇史』において、その名前が最も多く登場する朝鮮人でもある。言うならば、当時の日本の演劇界において最もその存在感が大きかった演劇人であったのだ。それにも関わらず、安英一の演劇活動を総括するような研究は、日本はもちろんのこと、韓国においても未だ行われていない。韓国の演劇研究においても、長きに渡る彼の演劇活動を中心的に扱った研究書も、研究論文さえも現時点では見つけることができない状況だ。

このような現状には、戦時下の国民演劇運動の時期には朝鮮演劇文化協会の理事として、また国民演劇の代表的な演出家として当局に協力したという彼の植民地末期の経歴、そしてさらには、最終的に北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国、以下「北朝鮮」と称する)に身を移し、当地における演劇の成立と発展に大きく貢献したという彼の朝鮮独立以降の経歴が、影を落としていたと推定される。韓国で植民地末期における戦争協力の文学・芸術が本格的に研究され始めたのは、ここ20年の間のことであり、イデオロギーの呪縛から離れて、北に渡った文人や芸術家たちについて自由に研究できるようになったのも、同じほどの歴史しか持たないのだ。しかしながら、2000年代以降、戦時下の国民演劇期や朝鮮半島の解放期(1940年代後半)の演劇が注目され、その詳細に関する研究が活発に行われるようになってからも、安英一に関する本格的な研究が登場することはなかった。

それは、おそらく彼が演出家兼演劇運動のリーダー的な存在であり、戯曲を残した劇作家ではないという点に起因すると考えられる。確かに演劇の舞台や演出の詳細は容易に再現できるものではなく、後世において過去の演出家の活動を振り返り、その意義や限界を探ることは根本的な限界が内在するからである。しかし、日本と朝鮮のダダイズム運動に注目した吉川凧の『京城のダダ、東京のダダ：高漢容と仲間たち』(2014)のような近年の研究が示唆しているように、資料が極端に限られている研究領域においても、人的つながりに注目することで、当時の日本と朝鮮で同時進行していた様々な芸術運動の様子を振り返り、その意義を考える作業は十分な価値を有する。本研究は、このような先行研究に触発され、安英一の活動を媒介に、戯曲のテキストに還元されない朝鮮演劇史の諸場面に光を当てようとする挑戦である。

2. 研究の目的

本研究は、日本および朝鮮で活動した演劇演出家である安英一(アン・ヨンイル 1909~1967?)の植民地期および朝鮮独立以降の演劇活動全般について総括的な調査研究を行い、それを通時的に考察しようとするものである。研究の遂行にあたり、本研究は植民地期における安英一の演劇活動(1930年代半ばまでの新劇の経験だけでなく、戦時下の国民演劇運動の経験までを含めた)が、朝鮮の独立以降に展開された彼の政治的な演劇運動における運動方法の枠を形作った、という作業仮説を採用する。この仮説を検討することで、これまでの研究において看過されてきた、朝鮮半島の演劇運動における植民地期と解放期以降との連続性を明らかにすると同時に、劇作中心の演劇史では見えてこなかった朝鮮演劇の諸場面に光を当てることを目指す。

本研究は、安英一の演劇活動を大きく4つの時代に分けて把握している。1930年代の日本活動期、朝鮮に帰国してからの国民演劇期、解放直後の南における左翼演劇運動期、北朝鮮に渡ってからの北朝鮮演劇形成期、である。そのなかで本研究は、安英一の演劇活動において未だその全貌が明らかになっていない二つの時期(、の時期)に集中して調査研究を行う予定である。

3. 研究の方法

初年度と次年度は、安英一の日本滞在中の演劇経験をなるべく詳細に把握することに集中した。具体的には、在東京朝鮮人劇団に関する資料や先行研究、また新築地劇団・新協劇団の公演史に関する資料や先行研究を参照しながら、安英一がかかわったことが明らかであるか、その可能性の高い公演、また観劇した可能性の高い公演などを調査した。それによって、日本における安英一の演劇経験を可視化し、それが国民演劇期の彼の演出活動や解放期以降の演劇運動においてどのように継承されているか、あるいは変容していくかを分析できるような準備作業を行った。しかし、それ以降、コロナ禍における研究活動の制約により、研究の方向を大きく変更せざるを得ない状況に直面した。そのため、本研究は日本国内における研究調査だけでも一定の研究成果

を期待できる主題として、村山知義の朝鮮関連活動を再考することを当面の研究課題として設定し、その研究に着手した。具体的には神奈川県立近代美術館に所蔵されている村山知義自作のスクラップブック資料を調査し、村山が1945年の朝鮮長期滞在時に行った演劇活動の詳細を明らかにした。そのような調査を基に、村山の朝鮮関連演劇活動を総括し、その意義を論じる作業を行った。

4. 研究成果

安英一の演劇活動に関する調査研究(上記の時期)では、新協劇団内部で発刊された新聞・出版物などを綿密に調査することで、安英一・李康福など、在日朝鮮人の演劇活動について、新しい情報を得ることができた。また、1940年代後半の解放期の朝鮮演劇全体の流れの中で、安英一をはじめとする左翼演劇人たちの活動を把握する作業を行い(上記の時期)その成果は解放後朝鮮の文学・文化史を再考することを目的とした国際シンポジウムで発表した。具体的には、解放期朝鮮の演劇における植民地期との連続と断絶の問題を考察した研究発表で、日本の新劇復活の状況と比較しながら、より広い視野で朝鮮演劇の再出発の諸場面を考察することができた。

村山知義を中心に据えた研究においては、これまでほとんど注目された来なかった村山のスクラップ資料や彼が朝鮮での長期滞在(1945年4月~12月)を終えて日本に帰国してから残した演劇評論などを用いることで、新協劇団の『春香伝』公演(1938年)だけに集中して来た既存の研究を大きく更新し、新たな論題を提供することができた。この作業を基にして、村山の朝鮮演劇関連活動を総括した研究成果を共著の形で発表した。その内容は、1920-30年代のプロレタリア演劇運動および新協劇団結成以降の、朝鮮演劇人との連帯の時代から、1945年の朝鮮での長期滞在、さらには日本に渡ってから朝鮮演劇と関連して行った様々な活動と論考を含める。また、簡単にではあるが、1957年日本新劇代表団の中国・北朝鮮訪問によって可能となった村山の北朝鮮訪問や晩年の70年代にまで続いた『春香伝』関連の活動にも触れることで、村山と朝鮮演劇という主題を通時的に把握することを目指した。

この研究成果は村山を中心とするものではあったが、彼と交流の深かった朝鮮人たち(安英一、李曙郷、李康福、金史良などの演劇人、そして趙沢元などの舞踊家)にも適時触れている。新型コロナウイルスの流行によって、日本で遂行可能な研究に集中するために、村山を中心とするものに当面の研究目標を修正したわけだが、その研究を通じて、安英一などの朝鮮演劇人の活動を通時的に再検討するという本研究課題の本来の目的も、一部果たすためであった。

なお、研究の最後年度には朝鮮の国民演劇期(上記の時期)に関する研究に着手し、安英一や金承久の国民演劇活動に関する論文を新たに発表することができた。このように、当初の研究目的に近い研究成果を加えることができ、さらにその成果を日韓の両言語で発信できたことは幸いである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金 杜蘭	4. 巻 70
2. 論文標題 パロディとしての国民演劇論序説 『寒駅』・『山河有情』・笑い	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 韓国現代文学研究	6. 最初と最後の頁 109-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金 杜蘭
2. 発表標題 村山知義と朝鮮 新協劇団『春香伝』以降を中心に
3. 学会等名 文学文化研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金 杜蘭
2. 発表標題 解放直後における進歩的朝鮮演劇の企画と国民演劇運動
3. 学会等名 国際シンポジウム：解放後の韓国文学・文化史の再認識
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金 杜蘭
2. 発表標題 朝鮮演劇という参照項 村山知義の解放前後について
3. 学会等名 福岡韓国学シリーズ
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 今村武、佐藤憲一、西村醇子、川村幸夫、内田均、杉本章吾、金牡蘭	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 415
3. 書名 越境のパラダイム、パラダイムの越境	

1. 著者名 神山彰、日比野啓、小針侑起、瀬戸 宏、間ふさ子、金 牡蘭、佐藤和道、畑中小百合	4. 発行年 2023年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 368
3. 書名 戦時下の演劇：国策劇・外地・収容所	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------